

---

# じいちゃんが飛んでった

柳 大知

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

じいちゃんが飛んでった

### 【Nコード】

N3725F

### 【作者名】

柳 大知

### 【あらすじ】

部活を終え山の中の家に帰ってきた中学生のユウタ。ほっと一息つく間もなく、聞こえてきた母の叫び声、「じいちゃんが飛んでった」

（ぼくのおじいちゃんは、すごいはつめいかです、おじいちゃんはなんでもつくれます、だからぼくはおじいちゃんがだいすきです。）そんな内容の作文を数年前に書いたことを今ではすっかり忘れている中学生のユウタは、部活に加え、灼熱の太陽の下の山道を自転車です上ってきたことで体が失った水分を取り戻すため、家の冷蔵庫から命の源であるキンキンに冷えた麦茶を取り出しグビグビと音を立てて飲んでいた。

そのとき、

「ユウタ、じいちゃん飛んでった！」

少し離れた庭で、母が大声で叫んだのだ。

普通の人がその言葉を聞いても訳がわからないだろうが、ユウタにはその意味がすぐに理解できたので庭へ駆け出た。

「えっ！あれ蔵に封印したんじゃないの？」

ユウタは封印と言ったが、実際はじいちゃんがそれを手にできないように蔵に鍵をかけ、隠しただけのことだった。

「わからん、でも、蔵が開いとる」

おそらく、母が隠していた鍵をじいちゃんが見つけたのだろう。

「どっち行った？」

そう聞くと、母は右上空に向かい指を突きあげた。

「あっ！あれや！」

遙か上空に、ポツリと人影のようなものが見える、

この眼で、はつきりと、あれがじいちゃんだと確認するのは無理だが、パラシュートやパラグライダーで空にいる人と違って、カラフルな物体や装置を伴わずにあんな風に空を飛ぶ人間は、じいちゃんに違いなかった。

「俺、行ってくる。」

ユウタは、さつき降りたばかりの自転車に跨り、上空のじいちゃんを見ながら、その姿を追った。

だが、じいちゃんは一体どこへ行くのかわからない。

とりあえず、じいちゃんの姿を見失わぬように、何度も空を見上げながら走った。

しばらくすると、上空のじいちゃんは急に移動するのを止めた、どうしたのだろうと、ユウタがじつと空を見上げていると、その姿がゆっくりと近づいてきて、だんだんと大きくなってきた。

（よかった、降りてくる…）

だが、じいちゃんは目測を誤ったのか、ユウタのいる場所から、少し離れた森の中に降りてった。

ユウタはそこへ向かいペダルをこいだ。

「じいちゃん！大丈夫か？」

ユウタが問いかけると、森の中からヘルメットとスキーゴーグルをつけたじいちゃんが出てきた。

「おう！ケンタか！」

ケンタは父の名前だった。

「違うよ、じいちゃん」

そういうと、じいちゃんはゴーグルをはずし、首にかけると、ユウタの顔をまじまじと見た。

「おおおお！ユウタか！」

ようやく合点したようだ。

「もう、それは使っちゃだめって、言っただろ」

そう言われた、じいちゃんは「うむ」と呟いただけで黙ってしまった。

「それ、外して、俺にちよーだい」

それとは、じいちゃんが蔵から持ち出した。封印されていたヘルメットだった。

じいちゃんは、渋々そのヘルメットを脱ぐとユウタに渡した。それを自転車の前かごに押し込み、じいちゃんを後ろに乗せ、

「俺の体、ちゃんとつかんでなよ」

そう言ってユウタは家を目指し本日二回目の山上りをはじめた。

じいちゃんは昔、何かよくわからないけどすごい装置を発明したりして、知る人ぞ知る発明家だったらしい、だけど80歳を過ぎてポケが急激に進行して、最近では、残念なことに家族との会話すらあまり成立しなくなっていた。

そんなじいちゃんが、少し前のあの日、突然（出来た）と叫んだかと思うと、大空に飛んでった。

しばらくして帰ってきた、じいちゃんは、少し残念そうな顔をし、

「まだ、だめだ」と呟いた。

じいちゃんが空から降りてきたのも驚きだったが、そんなことより僕らが驚いたのは、空から帰ってきたじいちゃんが、ヘルメットとゴーグル以外何にも身に着けていなかったことだ。そのとき、休みで家にいた父さんがじいちゃんに問いただと、じいちゃんはヘルメットを被るだけで飛べると言った。それは工事現場で働く人が被っているようなモノで、別にてっぺんに何とかポケットから出てきそうなタケトンボがついてるわけでも無く、いたって普通なものだった。

試しにヘルメットを父から順に被ってみたが家族の誰も1センチすら地面から足を浮かすことは出来なかった。

じいちゃんは笑いながら言った。

「秘密は誰にも教えないよ」

すぐに、父さんはヘルメットを知り合いの研究者に見せてまわったが、誰に見せても、答えは何のへんてつも無いヘルメットで、こんなものだけで空が飛べるわけがないと、みなに笑われたそうだ。

それで父さんは、じいちゃんに真相を何度も聞いたが、じいちゃんは決して答えなかった。

しばらくして、家に都会の大企業から人が訪ねてきて、じいちゃん

と契約をしようとしたが、じいちゃんは金はいらないし、秘密は誰にも教えないの一点張りで、ついに粘る相手を諦めさせた。相当なお金が入っただろうに、何で？と思った。でも、その秘密はじいちゃんにしか分からないので如何しようもなかった。結局、危険だし、何が起るかわからないので、ヘルメットをじいちゃんから取り上げ、蔵に封印した。

~~~~~

ユウタは自転車を降りていた。自転車のサドルには、ぼんやりしながら、じいちゃんが座っている。ユウタはじいちゃんを背に抱え走り出したが、じいちゃんの落下地点からほんの数メートル進んだところで、家に着く前にじいちゃんより先に自分が死ぬと感じて、じいちゃんを座らせ、その骨っぽい体を支えながら自転車を引いて歩いていた。

（すまんの、わしが歩ければ）

そんな汗を流している孫の労をねぎらうような一言も発さずに、じいちゃんは、ボーツと空を見つめていた。だが、しばらく進むと、じいちゃんは、うなだれるように首を下げると、ボソツと何かを呟いた。

「今日も…いけんかった…」

そういえば、じいちゃんは何が目的で空に飛び出したのだろうか？いけんかったって…どこに？ユウタは聞いてみた。

「じいちゃん、一体どこに行きたかったんだよ？」

じいちゃんは空を見上げ言った。

「あそこ、房江さんのところ…」

それを聞いたユウタは思わず微笑まずにはいられなかった。そしてじいちゃんに言った。

「何だ、じゃあ、何か思いついたら、俺に言ってよ。蔵の鍵なら開けられるからさ」

すると、じいちゃんはうれしそうに笑った。

「そうか！ケンタも行きたいか！房江さんに会いに！」

「ええ、ボクはまだいいよ」

房江はボクの婆ちゃんの名前だった。

じいちゃんが行きたいところはわかってる、きっと天国が空の上にあるって思ってるんだ。

ボクはまだまだ行きたくないし、じいちゃんだって空を飛ばなくても、いつかそこへ行けると思う。

それでも、じいちゃんがまた飛びたいって言ったら付き合ってあげようと思う。

ただ、飛び回るのはこの山の周りだけって約束してもらおう。

大丈夫だよな、

うーん、どうかな、また名前間違えてるし…

（終）

（後書き）

6 作目です

ひとつ前が、短編といいながら6千文字だったので、なるべく短いのをと思ったのですが、意外と長くなってしまった…

珍しくほのぼの系かも

（じいちゃんの秘密は自分にもわかりません…）

読んでいただいてありがとうございます。

コメントしていただけると非常にうれしいです！！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3725f/>

---

じいちゃんが飛んでった

2010年12月1日07時54分発行